

『毛沢東語録』研究（下）

（東京大学大学院）唐 亜明

Ⅱ 『毛沢東語録』と文化大革命

一 『毛語録』をめぐる党内闘争

1. 毛沢東の黙認

1964年版の『毛語録』が出てまもなく、毛沢東は秘書に「解放軍報」へ電話をかけさせ、『語録』を1冊送るように要求した。このことから毛はいち早く『語録』をみていたことが裏付けられる。65年11月19日、党中央弁公庁が「解放軍報」に電話を入れ、毛沢東は安徽省党委員会に紙型を与え、軍内部発行の『語録』を印刷することに同意したという。同12月、毛沢東はある談話の中で次のように語っている。「このほど私は列車の中で、服務員が手に持っていた『毛沢東語録』をはじめて目にしたが、それは軍が編纂したものであった。この『語録』というならば『論語』みたいなものだ」(日2)。

毛沢東が『語録』の形式で自分の思想を広めることに賛成し、自分の『語録』が全国に普及することを望んでいたことを裏付ける手紙が残っている。当時の楊成武総参謀長代理が劉志堅総政治部副主任に宛てたもので、全文は以下の通りである。

劉副主任:

毛主席は陳伯達同志に、全国に通用する『毛沢東語録』を編纂するよう指示されました。6万字前後の予定ですが、すでに半分ほどの約3万字ができあがっています。私のところにも1部送られてきました。陳伯達同志は、この『語録』は総政治部および各地で作られた『語録』をもとにして編集したので、総政治部の意見を求め、これに関して、討論する際には総政治部の人にも参加してほしいと言っています。

この件は林彪副主席にはすでに報告してあります。林副主席は、これは非常によいことで、大いに支持していかなければならない、必要であれば、何でもすると話されました。私に送られてきた原稿を同封しますので、関係者に検討させてください。陳伯達同志が尋ねてきたら、原稿に対する考えを伝えてください。あるいはその討論に参加していただいてもよろしいです。結果をご一報ください。

楊成武

1965年12月28日(日2)

しかし一方で、毛沢東は66年7月8日付の江青夫人にあてた手紙のなかで、「私はずっと、私のあの小さな本が、そんなに神通力があるとは信じてはいなかったが、彼(林彪)のひと吹きで、今や全国に吹き荒れ出している……私は彼らに迫れて梁山に登ったが、彼らに反対したところで、今さうどうしようもない。重大な問題について、心ならずも人に同意するのは、私の一生でこれが初めてのことだ」と心の内を明かしている(日20)。

「解放軍報」の『毛語録』編集担当者、田曉光の記憶によると、1967年3月、「解放軍報」は『毛沢東語録』にある「思想・意識・修養」という項目タイトルおよび劉少奇の言葉の一節について党中央に報告書を提出して、指示を仰いだ。当時、劉少奇はすでに失脚し、劉の著作『共産黨員の修養について』も批判されている最中であった。この報告書は毛沢東の娘、肖力(元「解放軍報」編集者)を通じて毛沢東の手に渡された。毛沢東は自ら「思想・意識・修養」を「誤った思想をただす」に直し、また劉少奇の言葉を削除した²⁰。

毛沢東が公の場で自分の『語録』が編集された

ことに異議を表明したことはなかった。江青への手紙は林彪が失脚した後に公表されたもので、その信憑性に疑問が残る。江青は、68年10月17日の中共第8期12中全会で、党規則の修正を討論した時、次のように発言している。「林彪同志はプロレタリア革命家の風格を備えている」「謙虚だし、党規則に書き入れるべきだ」「後継者として党規則に書き入れる」。同27日に「林彪を毛主席の後継者として必ず書き込まなければならない」と主張した。69年4月、さらに「林彪の名前を書き込めば、人の非望を抱かなくなる。全国人民は安心するだろう」と言っている(中8)。

文革の時、毛の目の前で、ほとんどすべての人が『毛語録』を振りかざし、「万歳!」を叫んでいたし、また朗読していたが、毛はそれに反対しなかった。毛沢東が『毛語録』の内容を知らなかったことは不可能であろう。もし全国民が学んでいるこの『語録』は自分の思想を歪曲し、分割したものであれば、毛の黙認は考えられない。この『毛語録』は自分の思想を概括したものだと思われ、毛が認めたことについて、議論の余地はないように思われる。

2. 劉少奇、鄧小平の抵抗

毛思想学習についての党内闘争は文革の導火線ともなった。1962年、劉少奇国家主席は自分の論文『共産党員の修養について』の改訂版を「人民日報」一面トップに掲載させた。その中にこういう一節がある。「同志の中には、人民に自分を称賛させ、オベッカをいわせて、自分が偉大なる人物で、英雄であるといわせており、そのために手段を選ばないものがある」。これは、毛沢東の個人崇拜を諷刺したものだと思われた。文革中に劉は次のように批判された。「劉少奇は毛著作を党員の基本教材とすることに反対し、その代わりに『共産党員の修養について』を押しつけ、事ある毎に理論活動の「単純化」「俗流化」に反対する

という口実で学習の「正規化」「系統化」を鼓吹し、結局は革命理論を「神秘化」して、広範な党員を毛沢東思想の門外に閉め出そうと努めた」(日15, 70年版)。

67年2月、毛沢東は劉少奇の『共産党員の修養について』を批判するよう呼びかけた。この本は延安で毛に肯定され、党員の必読書となっていたが、文革になると毛がこの本は階級闘争に触れない唯心論で、人だましの言い草にすぎないと批判した。もともと中国共産党内の毛沢東への個人崇拜は、劉少奇が最初に推進してきたもので、60年代に林彪が極端に走っただけである(中4)。劉少奇は抗日戦争中の「延安整風」の時期に、毛沢東をもち上げるなどによって党内での地位を固めたのである。しかし、1960年代から次第に毛の信頼を失い、毛への個人崇拜をもっと熱心に進めた林彪が取って代わったのである。

67年1月上旬のある日、中南海で劉少奇への闘争会が開かれた。劉は『毛沢東語録』の暗記をさせられたが、覚えていなかったため、民衆に嘲笑された。その時、劉はこう話したという。「語録の暗記はできませんが、毛主席のどの文章にどのような内容が書かれているのか、当時の歴史的背景はどうであるか、どういう問題に対し、どのような役割を果たしたか、理論上でどういった新しい創造があったのかなどについて質問してください。こういうものこそ毛沢東思想の精髓だと思います。私は『毛沢東選集』編集委員会の主任で、どの文章にも答えられます」(中21)。

一方、60年代の初めに、党中央書記処の総書記をつとめていた鄧小平の口からも、毛の個人崇拜を暗に批判した言葉が飛び出した。「年寄りだ。クソもたれないのに、便所に座らせることはない。辞職し、地位を譲るべきで、古い資格をひけらかすべきではない。われわれは青幫、紅幫(秘密結社)ではない。青幫、紅幫のほうがまだ開明的だ。上海の青幫のボスは黄金榮で、この子分

が蒋介石だ。黄金栄は年をとると、みずから蒋介石に地位を譲った。“青は藍より出でて藍より勝る”だ。われわれだといけないのか」61年には、「労働者、農民、兵士の毛著作学習運動は、明らかに通俗化、単純化、形式主義に陥っている」といい、党中央が毛著作学習運動に関する報告を提出した際、「この報告は全編、毛沢東思想ばかりではないか。マルクス・レーニン主義はどこへいったのか。この報告は発表してはならない」と指示した。または、62年12月の中央組織工作全国監察会議の席上で、「現在、人々は大胆に話をしなくなった。人に話をさせるには、秘密にすればよい。毛主席を打倒しようと、ある人が公然と提起したならば、その人が毛主席を打倒したいと考えていることが分かる。どうして悪いことがあるうか」などと発言している。65年3月の中央書記処会議では「物理を勉強するはずの人間が、一日中『雷鋒日記』『毛沢東語録』を暗記していたのでは、紅(政治、思想の革命化)にも、専(技術の専門家)にもなれないではないか」と語っている(日11、第5巻)。

鄧小平らは、小さな赤本が、マルクス主義と毛沢東思想を単純化し、卑俗化したものであると主張した。毛沢東をあらゆるマルクス・レーニン主義者のうち最高に偉大だとほめそやすのは、マルクス主義者の陣営内に無用な分裂を生み出すと論じた(日10)。当時、党内で毛沢東と毛沢東思想に対する外面的な尊敬を維持しつつも、これを空洞化しようとした動きは確かに存在していた(日1)。

しかし、文革が始まってから、劉少奇と鄧小平は失脚した。鄧は66年10月23日に毛沢東に提出した「自己批判書」で次のように述べている。「党の十一中全会において、林彪同志を主席の助手および後継者に決定し、かつ毛沢東思想の赤旗を高くかかげた一部の同志を中央の主な工作の地位につけたこと、これは非常に必要なことであり、非常に重要な措置である。わが国にとっても、世

界にとっても、非常に大きな意義をもっており、私は心から擁護する。林彪同志は、われわれの学習の手本である。まさに彼は毛沢東思想の旗を高くかかげているし、最もよく学び、最もよく活用しており、まさに彼は次の二点で抜きん出ている。すなわち、重大な問題については、すぐに主席に指示を仰ぎ、報告するので、最も主席の思想と意図を理解し、また最も大衆や下部の状況を理解している。したがって、彼の思想水準と指導水準はたいへん高く、毛主席の最も親密な戦友である。彼の指導した人民解放軍は、全国の学習の手本となっている。私のような誤りを犯したものは、まじめに林彪同志から学ばなければならない。これは私が誤りを改め、党と人民に対して、いくらかなりとも有益な仕事をするための唯一の道である」(日11、第5巻)。

文革中、鄧小平は江西省に下放労働された時、工場の毛著作学習会をかたくなに拒否した。監視員から鄧の書架に毛の著作はあるかと尋ねられ、夫人の卓琳はそっけなく「ない」と答えた。黄文華将校が鄧小平に毛の著作を貸してやると言った時、鄧は興奮して食ってかかった。「全部そらんじてますよ！ 実際のところ、主席の著作の一部は、私が参加して討議をもとに書かれたんですからね」。そして「それに私は目が悪い。『毛沢東語録』は小さな活字で印刷されていますから」といった(日24)。

復活後の鄧小平は林彪批判を展開した⁴⁴。文革後の1983年に出版された『鄧小平文選』に次のような発言がある。「林彪は、“老三篇”が毛沢東思想を代表するものだといって、毛思想を否定した。彼は毛沢東思想をマルクス・レーニン主義から切り離した。これは、毛思想をゆゆしく歪めたもので、われわれの党と社会主義の事業のためにも、国際共産主義運動のためにもきわめて不利である。……ご存知のように、毛沢東同志がある時点、ある条件のもとで、ある問題について語ったこと

は正しく、別の時点、別の条件のもとで、同じ問題について語ったことも正しかった。にもかかわらず、異なった時点、異なった条件のもとでは、同じ問題について語っても、ときには度合いが異なり、提起の仕方さえ異なることがあった。したがって、われわれは個々の字句からだけ毛思想を理解してはならず、かならず毛思想の全体系から正しく理解しなくてはならない」(中16)。

周恩来と『毛語録』の関わりについては、資料はあまりにも少ないようである。しかし、文革の時の写真や映画フィルムなどから、周がいつも『毛語録』を振りかざして、大いに「活用」していたことが分かる。

3. 林彪との対立

解放軍の毛著作学習運動の進め方について、総政治部主任の羅榮桓は最初から林彪と対立していた。羅は林彪が主張した「活学活用」「警句暗記」などの学習法は毛沢東思想を教条化するものだと反対した。1961年4月30日、羅榮桓と林彪は第26回軍事委常務委員会で衝突した。会議後、羅は電話でこのことを鄧小平に報告した。鄧は党中央書記処会議を招集して、その討論の結果は全員が羅の意見に賛成した(中15)。

一方、羅瑞卿は、59年、林彪の指名によって総参謀長に就任したが、その後、林彪とは「不倶戴天」の関係になってしまった。しかし最初の頃、毛沢東思想の宣伝に関しては、二人は対立するようなことはなかった。『毛語録』の編集出版には、羅はより具体的に関与した。62年に、羅瑞卿は「解放軍報」の「毛主席語録宣伝中間総括」に、「大きく掲載する方法がよく、これからも続けよう」と指示を与えている。64年、羅は最初に「軍外部のために『毛語録』を印刷してもよい」と許可した(日2)。ところが64年末から65年初めにかけてのベトナム戦争の激化によって、解放軍の戦闘体制の役割と責任が再認識されてきた。この結

果、これまで影をひそめていた「唯武器論」が軍内に台頭してきた。その代表者が総参謀長の羅瑞卿であった(日11、第1巻)。

羅瑞卿は林彪との争いに敗れて失脚した時、「毛思想の宣伝に反対した」というのが最大の罪となった。「羅瑞卿総参謀長は、“毛主席語録を載せすぎる”などといって、“解放軍報”を非難した。彼は中隊にまで配布するのは多すぎるという口実で毛主席の指示を印刷して兵士に配布することを許さなかった。羅は毛著作の活学活用を“教条主義”だと中傷し、公然と“中国に教条主義のしろものが少なくない、軍隊にもあるではないか”とわめきたてた。羅は表面では高級幹部にマルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの著作だけを学習させるよう取り決めたが、そのねらいは毛沢東著作の学習に反対することにあった」(日15、68年版)という。

しかし今度は、林彪が失脚して、羅瑞卿はまた最初から林彪の『毛語録』に異議を唱えたというように描かれている。「60年、林彪が毛思想の“頂点論”や“最高の最も生き生きしたもの”などと言い出した時、羅は真っ向から対立し、“まさかマルクス・レーニン主義、毛沢東思想はもう発展しないとでも言うのかね”と指摘した。61年、林彪が“名言暗記”“すぐさま効果が現れる”と提起した時、毛主席著作の精神の実質を真剣に学習しようとしないと批判した」「65年6月29日、羅瑞卿の自宅で総政治部名義の『毛沢東語録』再版序文を討論していた。序文にあった“最高最活”の言い方について羅は自信がないので、毛沢東の秘書、田家英に電話して指示を仰いだ。田はこの言い方は適切でないと答え、羅の意見と一致した」(中14)という。

一方、党中央宣伝部長の陸定一は、林彪の「暗記」「速成」「直ちに効果をあげる」というような毛著作の勉強方法に反感を示したので、「毛思想に反対した」というレッテルを貼られ、失脚した

(中10)。文革の初期、中央文革小組顧問の康生は、彭真、羅瑞卿、陸定一、楊尚昆の四人に次の“四大罪状”を挙げた。1、毛主席が偉大な指導者、世界人民の指導者であることに反対した。2、毛主席は全面的にマルクス・レーニン主義を発展させ、毛沢東思想は当代のマルクス・レーニン主義の頂点であり、最も水準が高く、最も生き活きたマルクス・レーニン主義であることに反対した。3、毛沢東思想の学習、宣伝に反対し、特に全世界に毛思想を宣伝することに反対した。4、毛主席著作の活学活用を簡単化、凡俗化、“ラベルを貼る”といって侮辱した(中12)。

一方、文化相の周揚は、61年2月の文化教材会議で林彪の指示に反対し、「毛沢東著作は、高級党学校の教材のみ使用すべきで、各教科で濫用すべきではない」と発言した。また4月には陸定一が、林彪指示はプラグマティズムであり、「俗流化」であると攻撃して、学校で毛著作を教えることに反対した。事実、解放軍が『毛沢東語録』を全軍に配布した後、一部の学生が全学生にも配布するよう要求したが、高等教育部ではこれを拒否し、文化大革命になってからやっと全学生に配布したし、各学校で課外に毛著作学習サークルをつくろうと試みた学生たちは、いずれも様々な制限をくわえられて弾圧されたといわれる(日15、69年版)。

また、72年4月26日のソ連作家同盟機関紙「文学新聞」は、その1月に死亡した陳毅外相が文革のさなか、紅衛兵をどなりつけた次のような「陳毅語録」を掲載した。「正直いって、おれはお前たちほど『毛沢東語録』を読んでいない。理由はきわめて明快だ。お前たちほどヒマがないからだ」

中国共産党内と解放軍内に、『毛語録』をめぐる様々な対立があったのは事実であり、この対立は直接に文革に反映したのである。

4. 文革の先鋒——解放軍

軍内部で「毛思想学習運動」を展開していた林彪は、64年1月の解放軍政治工作会議で、毛の指示をうけて、「文化革命」の推進を強調した。65年6月1日、解放軍は彭德懷国防部長時代に導入した階級制度を廃止した。朝鮮戦争終了後の55年2月、階級制をとって、正規軍としてスタートした人民解放軍は、わずか10年で、ふたたび労農紅軍時代の「階級なき軍隊」の伝統に復帰し、旧来の革命軍隊に立ち返ったのである。三百万人の解放軍の軍服のエリ章は全部ベタ赤となり、「指揮員」と「戦闘員」の区別だけになった(日11、第1巻)。解放軍の「文革」は、文化大革命の起点とされる65年11月以前に先行していたのである。

林彪が握っていた「解放軍報」は、65年の段階で先べんをつけて、「より高く毛沢東思想の偉大な赤旗をかかげよう」「永久に政治を優先させよう」「毛主席の著書を全軍の各種工作の最高指針としよう」などと題する「政治突出」の社説を7回も続けて発表し、繰り返し「毛主席の著書を読み、毛主席の話を聞こう」と呼びかけていた。社説の一つは「毛思想は現代におけるマルクス・レーニン主義の最高峰である」と賛美していた。

65年12月末から20日間、全軍政治工作会議が開かれた。その席上で、林彪派の蕭華総政治部主任は、「毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかかげ、政治優先の五原則を断固貫徹しよう」と題して報告した。その中で「二つの建軍思想、二つの建軍路線の闘争は、党内、軍隊内部における階級闘争の反映である……党が軍への絶対的指導を強化するには、毛思想によって全軍の頭を武装し、毛主席の話を永遠に守り、党の路線、原則、政策を実施するうえでの模範とならなければならない」と述べた(日11、第1巻)。

文化大革命の一つ重要な側面は、毛思想の学習であり、解放軍は毛思想の最も忠実な信奉者として文革の先頭に立った。「解放軍報」の積極的な

役割が66年4月頃から注目されるようになった。4月18日の「解放軍報」社説「毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかけ、社会主義文化大革命に積極的に参加しよう」は、翌日の「人民日報」に転載され、また党理論誌「紅旗」にも載った。この頃から「解放軍報」の社説または重要論文を「人民日報」を始め北京各紙が転載することが多くなり、軍の機関紙「解放軍報」が党の機関紙『人民日報』をリードする場面がしばしば見られるようになった。5月17日の「解放軍報」は、政治と業務のどちらが優先するかについて論じ、4月14日の『人民日報』社説を「政治最優先の毛思想から離れた間違った論である」と名指しではないが批判している。5月18日の『人民日報』は前日の「解放軍報」社説を転載して、「解放軍報」の批判を受け入れる形となった(日14, 67年版)。

66年5月7日に毛沢東が林彪に宛てた書簡、いわゆる「5・7指示」のなかで、戦時共産主義をモデルとしたうえで、「文革」による人間の改造を中心に社会改造の構想が打ち出された。この、「人類史上において前例のない文化大革命」とさえ表現された「文革」の任務は、毛沢東の言葉によると、「一闘、二批、三改」、すなわち第一は、党内の資本主義の道を歩む実権派に対する闘争、第二は、資本主義・修正主義思想を批判すること、第三、あらゆる旧制度を改革すること、であった(日17)。

5月18日、林彪国防相は党政治局拡大会議でクーデターのような政治反乱が中国で起こる可能性もあると述べ、さらに毛沢東および毛思想の演じる偉大な役割、毛思想の普及方法について語った。林彪は解放軍のイデオロギー教育のために『毛沢東語録』の発行を決めたことが正しい措置であり、実行すべきものであると強調して演説を終えた(日23)。

66年5月31日には、中央文革小組長の陳伯達が唐平铸(「解放軍報」編集長)を連れて「人民日報」

に乗り込み、呉冷西(「人民日報」編集長)の権力を奪取した。6月2日「人民日報」の第一面の一番上、題字の右横に、初めて「毛沢東語録」が登場した(日11, 第1巻)。さらに6月6日の「解放軍報」社説は「毛思想は当代のマルクス・レーニン主義の最高峰であり、最も活力に満ちたマルクス・レーニン主義である」と述べ、6月16日の『人民日報』は「現代の最も偉大な天才毛沢東同志は世界革命の舵取りである」と称えた。そのほか「毛思想はすべての事物を見る望遠鏡であり顕微鏡である」「毛思想は世界人民を照らす灯台である」といった表現がなされるに至った。

文革中、解放軍は「三支両軍」(三支とは左派、工業生産、農業生産を支持すること、両軍とは軍事管制と軍事訓練を行うこと)のスローガンのもとに、造反派による実権派からの「奪権闘争」に全面的に介入したのである。70年までに解放軍の将兵279万人がこれに動員されている。68年9月に省レベルの革命委員会(旧人民政府に代わる機関)が成立し終えた時、29省市のうち20個は軍隊の司令官、政治委員たちが「主任」となり、事実上、軍事管制を行なったのであった。県(日本の郡にあたる)レベル以上の革命委員会主任を軍隊の幹部がつとめた事例は、北京78%、広東81%、遼寧84%、山西95%、雲南97%、湖北98%であった(日19)。

二 『毛語録』の読まれ方

1. 学習の実態

文革が始まって、1966年8月18日の紅衛兵集会の時から、中国全土に毛沢東崇拜の波が広がっていた。『毛語録』を手から離さず、口からも離さないことが、革命と指導者に忠実である試金石になった。人々はまるで『語録』の中で暮らしていたかのようであった。

当時、北京に駐在していた日本人記者、柴田穂氏は次のように記録している。「文革中、“北京の

銀座”にあたる王府井の大きな新華書店をのぞくと、タナというタナは、全部、毛著作や『毛語録』で埋め尽くされていた。それ以外は、科学、医学書ぐらいで、文学、思想、政治、経済、歴史、哲学書などは、まったく見当たらなかった。マルクス、エンゲルス、レーニンの翻訳本すら姿を消していた」(日11、第3巻)。「市内の街角には、大きな“毛語録板”が立てられた。あちこちの煉瓦の壁や塀にも、“毛語録”が描かれた。見えるもの、聞こえるもの——すべてが毛、毛、毛……である。中国全土は、またたく間に、毛沢東の顔、像、言葉で埋め尽くされてしまった。外国人の泊まっている北京飯店、新僑飯店などのホテルで改造が始まった。正面玄関には“毛語録”が描かれた。玄関に入ると、正面に毛の大きな白い像がおかれるようになった。客室のすべての額縁は取り外され、“毛語録”を印刷した額縁と毛の肖像画の二つがどの部屋にも飾られた。廊下に出ると、各階段に『毛沢東語録』の外国版がおかれ、自由に持ってゆけるようになった。部屋でラジオのスイッチを入れると、北京放送は“大海航行靠舵手”という毛沢東賛歌がいつも耳に入ってくる。街を歩く紅衛兵デモ隊、ホテルの服務員(ボーイさん)の集会——どこでも、まず“敬祝毛主席万寿無疆”(毛主席の長寿を祈る)、“毛主席教導我們說”(毛主席はわれわれにこう教えている)から始まり、『語録』のページが指定されて、そこを声高く朗読するというスタイルになった」(日11、第1巻)。

「66年10月1日、文革になって最初の国慶節である。石膏でつくった白くて高い毛の立像のあとは、もう限りなく続く紅衛兵の波また波。約二百列の並んだ紅衛兵の巨大な流れが、怒涛のように押し寄せる。まるで赤いじゅうたんが転がってゆくようだ。百万を超える紅衛兵は手に手に『毛沢東語録』を高くかざして行進する。その目は天安門上の一点に注がれている。毛の姿を探しているのだ。毛が天安門楼の上にいないと、紅衛兵は足踏

みし、行進の流れが止まる。司会者がマイクで先へ進むように注意する。周恩来は楼上から紅衛兵の大群に向かって『毛語録』を大きく横に振って、早く先へ進むように合図する。毛の姿が現れると、紅衛兵は『語録』を力のかぎり振り、「毛主席万歳、毛主席万歳」と声のかぎり叫ぶ。天安門前は熱狂と興奮のルツボと化かす。泣いている紅衛兵の顔、顔、顔が双眼鏡に映る」(日11、第1巻)。

当時、紅衛兵の手引きとする文書「破旧立新一百例」に次の内容があった。1、町内会は責任をもって各町内に『毛沢東語録』の言葉を記した掲示板を立てよ。どの家も毛主席の肖像、『毛語録』の言葉をかけよ。5、『毛語録』は一人が一冊、つねに携帯し、機会あるごとに学習し、すべてその教えに従って行ふ。7、自転車、三輪車(輪タク)は毛の語録のプラカードをつける。バス、列車は毛の肖像をかけ、語録を記す(日5)。

文革が始まって、各地にたちまち「紅海洋」が現われた。「紅海洋」とは、街のあらゆる壁に赤いペンキを塗り毛語録を書く宣伝活動で、街全体がまるで赤い海のように見える。66年12月30日、中共中央と国務院は「紅海洋を禁止する通達」を出した。通達は「このような紅海洋は、毛沢東同志がかねてから提唱した質素な作風に反するばかりでなく、壁新聞を拒み、プロレタリア文化大革命に対抗する悪質の行為である」と批判する(中5)。同じ毛思想の宣伝なのに、「紅宝書」はよし、「紅海洋」はダメ、これはなぜだろうか。当時、民衆の攻撃的な壁新聞を貼るところがないように、多くの地方政府は民衆の毛語録を崇拜する気持を利用し、「紅海洋」をつくるための資金や人員を出した。一方、『毛沢東語録』を手にして政府役人を打倒しようとする紅衛兵がいて、もう一方では、毛語録を書いた「紅海洋」で抵抗しようとする政府役人がいた。両方とも毛語録を武器にしたのである。

当時、「反革命的、修正主義的教育制度」に対

する闘争として、事実上、全国のすべての学校は正常な活動を停止した。教科書の大部分が焼き払われ、『毛沢東語録』や『毛沢東選集』と入れ替えた。授業時間は著しく短縮し、高等学校などを抗日戦争中、延安にあった抗日軍政大学型の短期学校(1年程度)に変えることに決めた(日3)。広州の小学校では、文革が激化した66年9月当時、一日4時間授業のうち、毎日2時間を『毛語録』、他の1時間は唱歌(これも毛讃歌)、体育(毛思想宣伝)にあてるすさまじさで、通常の授業としては毎日1時間の算数だけで、中学、高校、大学でも同じような実情であった(日22)。

66年6月、中共中央と国務院が認可した教育部(文部省)の「1966-67年度中学校、高校の政治、国語、歴史の教科書についての報告」は次のように述べている。「小学生も毛沢東著作を学ばなければならない。小学生初級は『毛沢東語録』を、小学生上級は『老三篇』⁹⁴を学習する」67年2月、中共中央は「小学校の文化大革命についての通達(草案)」「中学校、高校の文化大革命についての意見(討論と試行用)」の中で、同じように規定した上、中学校、高校の授業は毛沢東著作を主とするように指示した。

また、国民の「早請示、晩匯報」は文革の初期から、71年9月の林彪事件まで続いた。その間、ほとんど全国の人々は毎日、集団で、或いは単独でこの儀式を行なった。「早請示」というのは、毎朝、毛沢東の顔写真の前に立って、『毛語録』を振りかざし、「われわれの心の中の最も赤い、最も赤い太陽である毛主席が長寿であるように。毛主席の最も親密な戦友、林彪同志が健康であるように」と決まり文句を述べて祈る。そして、「東方紅」という毛沢東讃美歌を歌い、いくつかの『語録』を暗誦する。それから自分の仕事にとりかかる。一日の仕事が終って、「晩匯報」をやる。形式は「早請示」とほぼ同じだが、歌を「大海航行靠舵手」に変える。

当時、電話交換手は「ウェイ」(もしもし)のかわりに「為人民服務」(人民に奉仕する)といい、お店の店員は「要闘私批修(私心と闘い、修正主義を批判する)、なににしましょうか」といったふうに、語録をまず口にする。「毛思想宣伝員」がバスに乗り込んで『語録』をひろげると、乗客全員が彼に続いて毛の格言を繰り返す。かばん、筆箱、ノートにだけでなく、キャンディーを包んでいる紙、マッチ箱などにさえ「毛語録」が印刷されていた。子どもたちが遊ぶ時に、最も信用される言葉は「毛主席に誓います」であった(中6)。

1967年6月17日、中国初の水素爆弾の実験が行われた時、爆撃機の操縦士、孫福長は『毛語録』を暗誦していたため、予定の朝8時に投擲器のボタンを押すのを忘れてしまった。イヤホンに地上からの周恩来首相の声がした時、はっと気がつき、2回目で投擲が成功したというような出来事もあった(中18)。

68年3月26日、林彪が「毛主席の本を毎日読み、毎日使わなければならない」と指示してから、「天天読」(毎日、毛語録と著作を勉強する)という方式はまず解放軍で始まり、そして全国に広がった。毎日、この学習の時間は「雷打不動」(どんなことがあっても変更しない)とされた(中10)。

68年3月16日付「人民日報」は「家庭学習班を大につくり、農民の思想は素晴らしい」という記事の中で次のように報道している。「67年の国慶節で林彪が毛沢東思想学習班をつくろうと呼びかけてから、各地の会社、学校、農村、工場などに続々と毛思想学習班が編成され、同時に、家庭学習班もつくられた。河北省晋県小樵公社小樵大隊の場合では、各家庭学習班ごとに字の読める人を補導員に選び、字の読める人のいない家で朗読し、全家族で暗記し、討論するという形で学習が行われた。朝早く起きて、婦人は朝食をつくりながら、食事の前後も一家でお膳を囲んで『毛語録』を読み、夜ふとんに入る前に夫は妻に、子どもは

母親に、孫はおじいさんに教え、互いに教え学び合った。毎回の学習内容は少ないが、学習の回数は多く、少しずつ積み重ねていくというやり方である。各家庭は5日に1度、家族全員で“闘私批修会”を行なっている。さらに農繁期で学習時間が取れないような時でも、農閑期になるのを待って開くのではなく、農作業が忙しくなればなるほど、“私”というものが出てきやすいので、むしろ、学習班を続けることを堅持した。仕事に出る前に、その日の農作業で起こりそうな問題にもとづいて、関係のあるいくつかの語録を学習する。休憩時間に集まって、みんなと一緒にになって語録を暗唱し、心をうちあげ、説明会を開き、晩御飯の後では一家で毛主席の最高指示に照らして一日の行動を点検するように、全社員が一致してこの学習運動を進めている」

1966年9月30日、各新聞は一斉に10曲の『毛沢東語録』の歌を掲載した。その後、多くの『語録』の歌が大衆の間で広く歌われるようになった(日15, 67年版)。『毛語録』にメロディーをつけて歌う「語録歌」や、『語録』の言葉に合わせて体操をする「語録操」や、毛沢東に忠実を表明する「忠字舞」という踊りなど、『毛語録』が国民の暮らしに密接に関わることによって、そこから派生して出てきた多くの「大衆文化」は、当時の中国に新しい文化現象を呈したのである。

1966年から71年までの5年間に、中国全土で1万種類、20億個の毛沢東バッジがつくられたと言われる。「毛主席は安源へ行く」という絵のポスターは一回で9億枚も発行した(中11)。67年5月、中央軍委は軍服姿の毛沢東バッジを全軍に支給することを決定した。統計によると、文革2年目の1967年、全国で日常的に毛バッジをつけた人は59%、68年に89%、ピークの69年に94%にも達し、ほとんど全国民が毛バッジをつけていた。中には毛への忠実を表わすために、裸の胸にそのままつけた人さえいた(中6)⁹⁾。

文革の初頭から、各地の紅衛兵などは、「大字報」のほかに、ガリ版を使つての「戦報」(機関誌)は数万種類を超え、発行部数はそれぞれ数千部から数十万部に達したといわれる。毛沢東の「最高指示」はマス・メディアや「戦報」、ビラ、標語などを通じて、その日のうちに全国に伝えられた。さらに講演、芸能宣伝、学習会などのコミュニケーション手段を通して、一般大衆に浸透していった(日17)。

毛思想を指針とした中国共産党の政策は、宗教と迷信に反対し、「宗教は人民のアヘンだ」というマルクス主義の教条を堅持してきた。毛沢東も革命の初期に、祭られていた神を放棄するよう農民に呼びかけた。文化大革命になると、反宗教の力は極点に達した。すべての伝統的風習、祭日、信仰が迷信や反共産主義とされ、紅衛兵たちは各地で寺、教会、みたまや、ほこら、墓などを破壊し、あらゆる宗教活動をやめさせた。しかし同時に、毛沢東は神様のような存在となり、毛崇拜はすべての宗教に取って代わった。文革中に流行った“三忠実”(毛主席、毛思想、毛の革命路線に忠実である)、“四無限”(毛に対し、無限に熱愛し、無限に敬慕し、無限に忠実し、無限に崇拜する)、“紅宝書”(『毛語録』)、“忠字舞”、“語録操”、“天天読”などは、いずれも宗教儀式のようであった(中12)。

2. 学習の特徴

文革の時、『毛沢東語録』の学習にはいくつかの特徴があった。① 声を出して読む。ほとんどの場合は多くの人が一斉に北京語で(少数民族語版を除く)朗読する。② 心をこめて、繰り返して唱える。暗記・暗唱が求められる。③ いつも『語録』を身につけて、日常的に毛語録を口にする。目に触れ、耳に入る機会も、書き写すことも多い。④ 講習会、交流会が頻繁に行われ、自分の考えと体験に照らし合わせて、感想を述べなけ

ればならない。

林彪は『毛語録』を学習するにあたっては、「問題をもって学び、活学活用し、学習と運用を結びつけ、さしせまって必要なものから先に学び、たちどころに効果が現れるようにし、運用に思いきり力をいれなければならない」と話した。これは解放軍内部で実行された後、文革の中で広く人民大衆によって採られた学習方法であった。つまり単なる書物の上の思想として読むのではなく、現実の闘いに活かして使おうというのである。『毛語録』という書物は、著者→読者というサイクルで読まれるのではなく、著者→学習運動→読者というサイクルの中で読まれるものであった(日7)。

『毛語録』は、政治教育の教科書であるが、一方で、中国の民衆の言語生活の上で大きな機能を果たしていた。やがて毛文体が流行し、毛風の言葉づかいが人々の生活の中に浸透していった(日12, 69年)。さらに、『毛語録』は中国全土に標準語(北京語)を押し広めるという予想外の成果をえたのである。「日本毛沢東著作言語研究会の第1回訪中団」は、1967年8月から9月にかけて、中国各地を見学したが、その際にこのことを確認したという。「それは、『毛語録』が現代中国の普通話の普及に絶大な役割を果たしているということである。広大な中国の国土には大きな方言だけでも5つ、ちいさな方言にいたっては無数に存在する。しかしそういうところでも、話の前に声をそろえて朗読する『毛語録』だけは普通話であることが多いのである。……『語録』の文が繰り返し読まれて暗誦されるようになる。それが日常の言語生活に反映しないわけではない。日常的に会話のなかに、語録は実によく活かされているのである。非常に分かりにくい方言で語る農民の話の中に、何回となく、いかにも自然に語録が引用され、その部分だけがよく聞き取れたことを思い出す」(日4)。

一方、文革中、造反派は『毛沢東語録』を武器にし、自分に有利な語録を選び出して、互いに攻撃し合った。この争いは「語録仗」(語録戦争)と呼ばれた(中10)。同一の語録に対しても、時には人々がそれぞれ異なる解釈を行なう。いずれの派もわれこそが「毛思想に最も忠実である」と主張した。すぐ『語録』の該当ページをめくって、真剣な表情でそれを棒読みする。「毛思想を守る」ために多くの地方で血なまぐさい武闘が繰り広げられた。

紅衛兵リーダーの韓愛晶は、このことについて毛沢東に聞いたことがある。「両方が主席のお言葉を利用して、自分たちの行動を正当化してきたのです。ところが主席のお言葉は異なる解釈がされやすく、相反する解釈さえ可能です」すると、毛は話した。「たしかに私の言葉は違った解釈ができる。それは仕方のないことだ。儒教をみてみるがいい。仏教、そしてキリスト教もだ。これら偉大な思想はみんな分派に割れている。それぞれ本家本元の真理に違った解釈をくわえているのだよ。いろんな解釈がなければ、成長も変化もありようがない。停滞が始まり、本来の教義は死んでしまうだろう」(日10)。

3. 海外でも人気

1965年の夏に、フランス・パリの郊外に滞在した日本人女性、都美納さんが次のように記している。「毎週の土曜日の昼過ぎになると、普段は静かで客も少ないオーベルジュが急ににぎやかになる。常連のグループの若者たちが(10人くらい)、パリの下町から到着するのだ。彼らはたちまちサロンふう食堂や廊下の窓ガラスふきや床掃除をやりだす。その後、食堂の一隅で読書会を始める。ずっと毛沢東の著作を読み合っているのだ。日本でもおなじみの赤いハンディーな『毛沢東語録』(フランス語の!)もそのテーブルの上にノートと一緒にのってたりする。おお、ここでも!となーん

か懐かしいような、世界の同時的な「今」を感じたことを思い出します。堅気の労働者を演ずるジャン・ギャバンの、渋いフランス映画にでも出てきそうな、あの娘たち息子たち。上の学校には進まず既に働いていて、現実の厳しさにも幼い時から触れ、だから芯はけっしてやわじゃないけれど、気のいい遠慮がちな人なつこさもあたたかく堪えている、みたいな若者…。食事の後、ギターも踊りも健在、中国の歌「東方紅」まで誰かが歌い出したことがある。……その3年後、日本で「五月革命」のニュースに接した時、パッと浮かんだのはあの若者たちの面影でした。ああやって培われていたグループのつながりが、あの中で燃えているのかもしれない。「五月革命」の後、フランスの雰囲気も一変したとか。あの頃ヨーロッパでも結構「毛沢東主義者」(マオイスト)といわれる人たちがいて、活発だったような印象がある。それから70年代にかけて、世界中で学生たちの過激といってもいい運動が、たしか展開していったような……」(日6)。

現在、ロンドンで光大書店という中国専門書店を経営している英国籍の中国人、鄧家祥によると、66年当時、彼が休日にロンドンのハイパークで『毛沢東語録』を売って、財をなしたという。その後、交通妨害という理由で警察に販売を禁止され、いっそのことと、彼は小さい本屋を開いた(日2)。

文革の時、『毛語録』は中国の国外での「帝国主義反対、修正主義反対」の活動に広く使われていた。66年、中国のある芸能団体はフランスで公演した時、開演前に必ず『毛語録』を読み上げるので、観客からのブーイングをうけた。大使館の責任者、宋之光(後駐日大使)は「必ずしも読む必要はない」とアドバイスをしたが、芸能団の団長は、「敵に反対されるのは悪いことではなく、よいことだ」という『語録』を引用して譲らなかった。宋之光は帰国した時、「毛沢東思想の宣伝に

反対した」というレッテルを貼られて批判された(日2)。

67年1月25日、中国のヨーロッパ留学生69名は、帰国のためモスクワを経由して、「赤の広場」のレーニン廟に花輪を捧げて、そこで『毛語録』を一斉に朗読したため、二、三百名のソ連の警官隊が学生を包囲して朗読の停止を迫ったが、学生たちがなおも朗読を続けるので暴力をふるって30余名を負傷させ、4名に重傷を負わせた。この流血衝突は当時の大ニュースとなった。それに対する抗議として、ソ連駐在の中国大使館は1月28日から大使館で暴行の写真を展示した。これもソ連側に破壊され、中国大使館員は暴行をうけた。中国政府は2月5日、政府声明を発表し厳しく抗議した。その後、中国全土の民衆は続々と集会を開いて、北京でデモに参加した人数は6日の一日だけでも数十万人にのぼった。

同じような暴行はモンゴルでも行われた。5月には3名の華僑教員が華僑の子弟に毛沢東思想を宣伝したということで、国外追放を命じられた。5月21日、これらの教員がウランバートル駅から乗車するにあたって、中国側の見送人が『毛語録』の朗読を始めると、モンゴルの武装警官と私服刑事が見送人を包囲して殴打し、20余名の華僑を連行した。この事件について、中国政府外交部は5月27日付声明を出してモンゴル当局を糾弾した(日15, 68年版)。

『毛沢東語録』を手にした中国大使館館員の「革命外交」は、多くの国でトラブルを起こした。街頭で「造反有理」のビラを配り、駐在国の抗議を受けた。バスの中で『毛語録』を朗読し、通行人に『毛語録』と毛沢東バッジをあげようとして反感を買う。ベールをかぶったイスラム女性に「婦人が頭をもたげる機会がやってきた」という語録を説いて怒鳴られる(日18)。

香港では、67年5月の反英暴動の時、群衆が『毛沢東語録』をかざしながら、香港総督府を取

り囲み、英国・香港政庁を非難した²²。人々は英国の軍隊や警察の武力弾圧をものともせず、『毛語録』を高くふりかざして、潮のように街頭にくりだした。あらゆる業種の労働者は次々とストライキや職場放棄を決行した(日15, 68年版)。

日本の自民党代議士が北京空港でタラップを降りながら、『毛語録』を振っていた。一方、日本の商社マンは中国から香港側に出たとたん、『語録』を地べたにたたきつけて、「コンチクショウ」と叫び、その晩、したたか酒を飲む(日11, 第2巻)というエピソードもあった。

ラオスの兵士は「命を犠牲にしてもこの本をなくさない」と誓い、アンゴラのゲリラ隊員は「困難な時には成果に目を向け、光明に目を向けて、われわれの勇気を奮い起こさなければならない」という毛の語録を覚え、密林の中で闘争を続ける。ジンバブエ、ペルー、ニカラグア、コンゴ、ベネズエラなどの運動家は「農村が都市を包囲」「小さい野火も広がって広野を焼き大火になる」という毛の教えに従い、支配者と戦っていた(中3)。

北京放送局の海外向け短波放送の番組表からも、文革当時、中国の対外宣伝の実情の一端を知ることができよう²³。

中国の文化大革命は、毛沢東が「発動」したから起こったというだけではなかった。この大衆運動の底流には、長い歴史の中で蓄積された解放への願望、権力に対する反抗心、および毛沢東が描いたユートピア社会主義へのあこがれ、そして新しい世界をつくろうとする自信などがあったと思われる。文革の必然性のようなものは、当時の世界各国にかなりの部分で共通して存在していたようである。

おわりに

『毛語録』が活用された文化大革命は、毛沢東の社会主義思想の究極の実現であった。「解放軍報」は文革の先鞭をつけ、軍は文革の先頭に立っ

た。解放軍がつくった『毛語録』は億部単位で発行され、類例をみない超ベストセラーになった。ちょうど1960年代から70年代にかけて、新しい変革を求めようとした時代の流れに合い、『毛語録』は世界的にも脚光を浴びた。『毛語録』に導かれて、人民が熱狂的にユートピア社会主義へと突進していった。文革中、中国の人々はまるで『毛語録』の中で暮らしていたようであった。毛沢東への大衆の個人崇拜は、社会主義という大きな幻想を目標とした一種の宗教的な信仰ともいえよう。『毛語録』には中国の近代史が縮写されているといっても過言ではないであろう。中国人民こそは『毛語録』の本当の創造者で、毛の遠大な理想の実現の参加者である。林彪が毛沢東の後継者とされた時、『毛語録』をつくった功績はすべて林彪の手柄にされたが、失脚すると罪となり、ぬれぎぬを着せられた。政治闘争に敗れた林彪を攻撃し、文革の失敗の責任を林彪に転嫁したため、『毛語録』も徹底的に否定された。『毛語録』が否定されてから、大衆の毛著作学習運動は実質的に停止した。

嵐のような文化大革命は、20世紀の中国の最も重大な歴史的な事件の一つであった。この事件は、「十年動乱」の結論だけで安易に片づけられるほど単純なものではない。文革を全面的に否定することは無数の被害者の心理に合致しているであろうが、歴史の事実には合致していない。社会主義の理想を夢見た中国の人民大衆こそは文革の主体であり、毛沢東や林彪、「四人組」にだまされた無辜者ではない。『毛沢東語録』の研究を通して、このことを最も強く感じるのである。

[注]

(22) 1996年8月11日付、葦梅雅氏の手紙

(23) 1975年9、10月、鄧小平は農村工作座談会で毛思想の宣伝について林彪を次のように批判した。「林彪の毛沢東思想を凡俗化するようなや

国年鑑』1970年版 中国研究所より)

(付録)

『毛沢東語録』の出版リスト

1997年12月作成

*『毛沢東著作版本述録与考訂』施金炎 主編
海南国際新聞出版中心 1995年

*『毛沢東生平思想研究索引』韓榮莪 武漢出版社 1994年

以上の2冊をもとに、筆者の調べた結果を加えて作成した。

毛主席語録 中国人民解放軍総政治部編印 <内部発行> 1964年5月第1版

毛主席語録 中共黒竜江省委<党の生活>編集部編 <内部発行> 黒竜江人民出版社 1965年3月

毛主席語録 吉林人民出版社<内部発行> 1965年9月

毛主席語録 吉林人民出版社<内部発行> 1965年11月第2版

毛主席語録 中国人民解放軍総政治部編印 1965年11月

毛主席語録 人民出版社編印<見本> 1966年1月

毛主席語録 中共広西チワン族自治区委員会弁公庁編 広西チワン族自治区人民出版社 1966年8月

毛主席語録 中国人民解放軍総政治部編印<内部発行>1966年1月 (この版は、山西、内蒙古、遼寧、吉林、黒竜江、江蘇、安徽、福建、江西、山東、河南、湖北、湖南、広東、四川、貴州、甘肅、寧夏などの人民出版社および北京出版社、上海出版社印刷公司以印刷した。)

毛主席語録 中国人民解放軍総政治部編印<内部発行> 1966年10月 (天津、吉林、江蘇、安徽、福建、江西、四川、陝西、寧夏、青海、新疆などの人民出版社および北京出版社、内蒙古

教育出版社で印刷した。)

毛主席語録 中国人民解放軍総政治部編印 1966年8月 (毛沢東の写真入り)

毛主席語録 雲南人民出版社 1967年5月

毛主席語録 中国人民解放軍総政治部編 中国人民解放軍戦士出版社 1967年5月

毛主席語録 中国人民解放軍総政治部編 中国人民解放軍戦士出版社 1967年8月 (ビニールカバーとハードカバー2種、内部発行)

毛主席語録 中国人民解放軍総政治部編 中国人民解放軍戦士出版社 1967年9月

毛主席語録 中国人民解放軍総政治部編 福建人民出版社 1967年9月

毛主席語録 (カード式)福建人民教育出版社 1967年

毛主席語録 湖北人民出版社 1968年10月

毛主席語録 中国人民解放軍総政治部編 人民出版社 1969年2月

毛主席語録 (カザフ語版)民族出版社 (内部発行) 1966年5月、1966年9月、1967年3月、1968年9月

毛主席語録 (朝鮮語版) 民族出版社 1966年5月、1966年8月、1966年11月、1969年1月

毛主席語録 (朝鮮語版)民族出版社翻訳 延辺教育出版社 1966年10月

毛主席語録 (モンゴル語版) 民族出版社 1966年4月、1966年8月、1966年9月、1966年12月、1967年2月、1969年4月

毛主席語録 (モンゴル語版)新疆人民出版社 1966年11月

毛主席語録 (チベット語版) 民族出版社 1966年8月、1967年5月、1968年8月

毛主席語録 (ウイグル語版) 民族出版社 1966年4月、1966年8月、1967年11月、1969年1月

毛主席語録 (ウイグル新文字版) 民族出版社 1966年8月

毛主席語録 (ロシア語版) 外文出版社 1966

- 年、1971年
- 毛主席語録（アラビア語版） シリア ダマスカス出版社 1967年
- 毛主席語録（アラビア語版） 外文出版社 1967年
- 毛主席語録（アラビア語版） アラブ首長国連邦 カイロカンキウ書店 1967年
- 毛主席語録（ウルドゥ語版） 外文出版社 1967年、1972年
- 毛主席語録（タミール語版） 外文出版社 1967年、1972年
- 毛主席語録（タミール語版） セイロン 人民出版社 1967年
- 毛主席語録（サンスクリット版） セイロン 人民出版社 1967年
- 毛主席語録（ホサ語版） 外文出版社 1967年
- 毛主席語録（イタリア語版） イタリアミラノ 東方出版社 1967年
- 毛主席語録（イタリア語版） 外文出版社 1967年、1969年
- 毛主席語録（ポルトガル語版） 外文出版社 1967年、1972年
- 毛主席語録（アルバニア語） 外文出版社 1967年
- 毛主席語録（ノルウェー語版） 外文出版社 1967年、1972年
- 毛主席語録（ベルギー語版） ベルギー国際図書出版会社 1967年
- 毛主席語録（スウェーデン語版） スウェーデン エーテボリ 1967年
- 毛主席語録（デンマーク語版） コペンハーゲン 未来出版社 1967年
- 毛主席語録（モンゴル語版） 外文出版社 1967年、1970年
- 毛主席語録（ラオス語版） 外文出版社 1968年、1972年
- 毛主席語録（バングラデシュ語版） 外文出版社 1968年、1972年
- 毛主席語録（英語版） 外文出版社 1966年、1968年、1972年
- 毛主席語録（中英対照） 北京 東方紅出版社 1967年8月
- 毛主席語録（英語版） アメリカ コールジ出版社 1967年
- 毛主席語録（英語版） アメリカ バンタム図書会社 1967年
- 毛主席語録（英語版） インド ニューデリー思想出版社 1967年
- 毛主席語録（スペイン語版） 外文出版社 1966年
- 毛主席語録（フランス語版） 外文出版社 1966年、1972年
- 毛主席語録（フランス語版） フランス パリ 1975年
- 毛主席語録（朝鮮語版） 外文出版社 1967年、1972年
- 毛主席語録（パキスタン語版） パキスタン ラホルウディ図書館出版社 1967年
- 毛主席語録（ビルマ語版） 外文出版社 1967年、1969年、1972年
- 毛主席語録（タイ語版） 外文出版社 1967年、1969年、1972年
- 毛主席語録（インドネシア語版） 外文出版社 1967年、1972年
- 毛主席語録（インドネシア語版） 外文出版社 1967年
- 毛主席語録（カンボジア語版） カンボジア華僑印刷 謄写版 1967年
- 毛主席語録（ベトナム語版） 外文出版社 1967年
- 毛主席語録（ネパール語） 外文出版社 1967年、1972年
- 毛主席語録（ペルシア語版） 外文出版社 1967年、1972年

- 毛主席語録 (スワヒリ語版) 外文出版社 1967年、1972年
- 毛主席語録 (ポーランド語版) 外文出版社 1968年、1972年
- 毛主席語録 (チェコ語版) 外文出版社 1968年
- 毛主席語録 (ハンガリー語版) 外文出版社 1968年、1972年
- 毛主席語録 (セルビア語版) 外文出版社 1968年
- 毛主席語録 (ルーマニア語版) 外文出版社 1968年
- 毛主席語録 (ドイツ語版) 外文出版社 1967年、1968年
- 毛主席語録 (アイスランド語版) アイスランドレイキャビク 1969年
- 毛主席語録 (トルコ語版) 外文出版社 1969年
- 毛主席語録 (プシト語版) 外文出版社 1969年
- 毛主席語録 (ブルガリア語版) 外文出版社 1968年
- 毛主席語録 (ギリシア語版) 外文出版社 1969年
- 毛主席語録 (フィリピン語版) 外文出版社 1972年、1977年
- 毛主席語録 (エスペラント版) 外文出版社 1967年
- 毛主席語録 (点字版) 上海盲人中学印刷所 1966年
- 毛主席語録 (点字版) 盲人月刊社 1967年7月
- 毛主席語録 (点字版) 盲文出版社 1968年7月
- (以下は日本語版)
- 毛沢東語録 外文出版社版 中華書店 1966年
- 毛沢東語録 社会主義研究所毛沢東語録研究会訳編 宮川書店 1966年
- 毛沢東語録 和田武司・市川宏 訳 河出書房新社 280円 1966年
- 毛主席語録 外文出版社 1966年
- 毛沢東語録 外文出版社編訳 中日出版社 1966年
- 毛沢東語録 徳間書店 1966年
- 毛主席語録抄 東方書店 1966年
- 全訳毛沢東語録 中嶋嶺雄監修 市村水城訳 いずみ書房 1966年 1967年
- 毛沢東語録 和田武司 市川宏訳 河出書房<ワールド・ブックス6> 1967年
- 毛沢東語録 中国人民解放军総政治部編 宮川書店 280円 1967年
- 毛沢東語録 外文出版社訳 東京書店 1967年再版
- 毛沢東語録——学生運動について 東方書店 1968年
- 毛主席語録 外文出版社 1968年
- 毛沢東語録 毛沢東著作語録研究会編 大安書店 1968年
- 毛主席語録 北京・外文出版社版 東方書店 150円 1968年
- 毛沢東語録 東方書店 改訂版 1969年
- 毛沢東の言葉 近代思想研究会編 芳賀書店 600円 1969年
- 毛沢東最高指示——プロレタリア文化大革命期の発言 新島淳良編 三一書房 1970年
- 毛沢東語録——付・奪権闘争を論ず 竹内実訳 角川書店 260円 1971年
- 毛沢東語録 和田武司・市川宏 訳 河出書房新社 450円 1971年
- 毛主席語録 第4版 外文出版社 1972年
- 毛沢東語録 中嶋嶺雄 訳 講談社文庫 220円 1973年
- 毛沢東語録 竹内実 訳 平凡社 1000円 1995年
- 毛主席語録一百条 (内部発行) 湖北人民出版社 1966年6月
- 毛主席語録一百条 (内部発行) 中国人民解放军総政治部編 中国人民解放军戦士出版社 1966年

年

毛主席語録一百条 湖南人民出版社 1966年
 毛主席語録七十条 (英語版) 湖北人民出版社
 1966年8月
 毛主席語録六十条 中共広東省委宣伝部編 四川
 人民出版社 1966年5月
 毛主席最高指示 江西人民出版社 1968年1月
 毛主席最新指示 天津市革命委員会政治宣伝組編
 天津人民出版社 1968年10月
 毛主席最新指示 (1968年以来発表したもの)四川
 人民出版社編集出版 1969年2月
 毛主席最新指示 青海人民出版社革命委員会
 1968年11月
 毛主席最新指示 雲南人民出版社 1969年3月
 毛主席最新指示 (チベット語版) 青海人民出版
 社 1968年9月、1968年11月
 毛主席最新指示(プロレタリア文化大革命につい
 て) 折江人民美術出版社 1968年
 毛主席最新指示 (一九六八年)新疆人民出版社
 1969年2月
 一九六八年以来新聞雑誌で発表した毛主席最新指
 示(学習資料)四川人民出版社 1969年
 毛主席最新指示(プロレタリア文化大革命につい
 て) 点字版 盲文出版社 1968年
 最高指示 首都大專院校紅代会、中国人民大学新
 人大公社宣伝部編集印刷 1967年
 最高指示 北京師範大学革命委員会政治部編集印
 刷 1967年7月
 最高指示(内部発行)天津人民出版社 1968年9月
 最高指示(内部発行) 湖南人民出版社革命連合委
 員会編 湖南人民出版社 1968年
 最高指示(内部発行) 甘肅省革命委員会政治部宣
 伝組織 甘肅人民出版社 1969年
 最高指示(プロレタリア文化大革命以後に発表さ
 れた毛主席語録)(内部出版) 江蘇人民出版社
 1968年
 最高指示 中国人民解放軍戦士出版社 1969年3

月

最高指示 甘肅人民出版社 1969年3月
 最高指示(内部発行) 青海省毛主席著作出版發行
 管理处 1969年8月
 最新最高指示 中国人民解放軍戦士出版社 1969
 年4月
 最新最高指示(点字版) 盲文出版社 1969年8月
 毛沢東名言精粹 万方編 大連出版社 1990年9
 月
 テーマ別の語録
 毛沢東論中日戦争 袁西樵編 陝西人民出版社
 1937年10月
 毛沢東抗戦言論集 張劍萍編 戦時読物編訳社
 1938年1月
 毛沢東抗戦言論全集 葉晴編 漢口民族解放社
 1938年1月
 毛沢東最近的抗戦主張 向愚編 戦時出版社
 1938年1月、11月
 毛沢東救国言論選集 重慶新華日報館 1939年5
 月
 毛沢東同志論新民主主義的文化教育 新教育学会
 編 東安東北書店 1947年6月 大連大衆書店
 1948年4月
 毛沢東論知識人 教育出版社 1948年4月
 毛沢東論聯合政府具体綱領 北平 1949年1月
 毛主席關於教育工作的言論 河南人民出版社
 1958年6月
 毛沢東論宣伝 中国人民大学新聞学部編 同大学
 出版社 1958年9月
 毛沢東同志論教育工作 人民教育出版社 1958年
 9月、59年3月、8月、9月
 毛沢東同志關於教育工作的言論 中共広東省委宣
 伝部編 広東人民出版社 1958年10月
 毛沢東論財政 中国科学院經濟研究所編 財政出
 版社 1958年10月、59年4月、12月
 毛沢東論教育 人民教育出版社 1958年

- 毛沢東論文芸(漢文11種, 少数民族文7種, 外文3種) 中国科学院文学研究所編 人民文学出版社 1958年12月, 66年, 67年, 83年
- 毛沢東論文学芸術 人民文学出版社 1958年12月
- 毛沢東同志論我国社会主义經濟 中国人民大学經濟系資料室編 1958年12月
- 毛沢東同志論帝国主義和一切反動派都是紙老虎(漢文5種, 少数民族文9種, 外文37種, 盲文1種) 人民出版社ほか 1958年, 59年, 61年, 64年, 65年, 66年, 67年, 70年)
- 毛沢東同志論農民問題 中共雲南省委党校編 雲南人民出版社 1959年2月, 6月, 60年8月
- 毛沢東論社会主义社会内部矛盾 吉林師範大学政治教育系編 吉林人民出版社 1959年4月
- 毛沢東同志論五四運動 共青团北京市委宣傳部編 北京出版社 1959年4月
- 毛沢東同志論發展生產与關心群衆生活 中共雲南省委党校編 雲南人民出版社 1959年5月
- 毛沢東論商業 黑龍江省商業科学研究所編 黑龍江省人民出版社 1959年6月
- 毛沢東同志國際問題言論選錄 北京大学法律学部編 世界知識出版社 1959年8月
- 毛沢東同志論反对右傾机会主義 中共湖北省委党校編 湖北人民出版社 1959年9月
- 毛沢東同志論弁証唯物主義与歷史唯物主義 湖北大学政治系編 湖北大学教材科印 1959年10月
- 毛沢東同志論和平与戰爭 公安部弁公庁編印 1959年12月
- 毛沢東同志論經濟 北京大学經濟学部55級編印 1960年1月
- 毛沢東同志論無產階級和肅反工作 群衆出版社編集部編 群衆出版社 1960年1月
- 毛沢東同志論政治經濟学諸問題 中共江西省委講師团編 江西人民出版社 1960年2月
- 毛沢東論調查研究 中国人民大学計画統計学部編 同大学出版社 1960年4月
- 毛沢東同志論青年和青年工作「中国青年」編集部編 中国青年出版社 1960年4月, 64年8月
- 毛沢東主席同亜洲, 非洲, 拉丁美洲人士的幾次重要談話(中文1種, 外文20種)外文出版社 1960年, 63年, 66年
- 毛沢東論哲学 中国人民大学哲学学部編 同大学出版社 1960年
- 毛沢東的政治学說(摘錄) 中国人民大学馬克思列寧主義政治学系編 1960年
- 毛沢東論地理科学問題 商務印書館編集出版 1960年5月
- 毛沢東同志經濟学說(摘錄) 中共新疆自治区委新疆青年出版社 1960年8月
- 毛沢東同志論党的建設 中共中央高級党校編 同党校出版社 1960年6月
- 毛沢東同志論社会主义經濟問題 安徽省哲学社会科学研究所編 安徽人民出版社 1960年6月
- 毛沢東同志關於我国經濟問題的論述 南開大学經濟系編 河北人民出版社 1960年7月
- 毛沢東同志論我国社会主义經濟問題 中国科学院河北省分院 河北人民出版社 1960年7月
- 毛沢東同志論馬克思主義哲学 中共新疆自治区委员会党校編 新疆青年出版社 1960年7月
- 毛沢東同志論調查研究 「解放軍報」編集部 重慶人民出版社 1961年2月
- 毛沢東同志論政策 新疆人民出版社 1961年3月
- 毛沢東論文学与芸術 人民出版社 1961年3月
- 毛沢東同志論政策 河北人民出版社編 河北人民出版社 1961年5月
- 毛沢東論調查研究 河北人民出版社 1961年5月
- 毛主席論農業和農民問題 浙江人民出版社編集出版 1961年11月
- 毛沢東論調查研究 貴州人民出版社 1961年11月
- 毛沢東論文学和芸術 人民文学出版社 1961年11月

- 毛沢東同志論階級闘争和人民民主專政 公安部編印 1962年9月
- 毛沢東同志論戦争与平和 人民出版社編 同出版社 1964年4月
- 毛沢東同志論政治工作(漢文22種, 少数民族文3種) 解放軍總政治部編 人民出版社 1964年5月
- 毛沢東同志論植民地半植民地革命運動 人民出版社 1964年5月
- 毛沢東同志論我国对外政策 人民出版社編 同出版社 1964年11月
- 毛沢東主席声明, 談話集一全世界人民聯合起来, 反对美帝国主義的侵略政策, 保衛世界和平(外文6種) 外文出版社 1964年
- 全世界人民團結起来, 打敗美国侵略者及一切走狗! (漢文1種, 少数民族文5種, 外文16種) 人民出版社 1964年, 65年, 66年, 67年, 68年, 70年, 71年
- 毛主席論人民戦争(漢文6種, 少数民族文4種, 外文35種, 世界1種) 解放軍總政治部編 解放軍戰士出版社 1966年2月 人民出版社 67年8月, 11月
- 毛主席論人民軍隊 解放軍總政治部編 解放軍戰士出版社 1966年8月
- 毛主席論党的建設 中国人民解放军總政治部編 中国人民解放军戰士出版社 1966年12月 北京出版社 1967年2月 内蒙古教育出版社 1967年11月 湖南省南鼎印刷場 1968年2月 天津人民出版社 1968年7月 (点字版)盲入月刊社 1968年5月
- 毛主席論無産階級世界革命和国际主義 解放軍總政治部編 戰士出版社 1967年1月
- 毛主席論反对經濟主義 光明日報社編 河南人民出版社 1967年1月, 8月
- 毛主席論教育 南開大学「衛東」編集部編印 1967年6月
- 毛主席論人民戦争 解放軍報 1967年8月1日
- 毛主席論教育革命 人民出版社 1967年12月, 68年1月, 2月, 7月
- 毛主席關於無産階級文化大革命的指示 湖南人民出版社編 湖南人民出版社 1968年1月
- 毛主席論知識分子 甘肅省革委会政治部宣伝組編 甘肅人民出版社 1968年
- 毛主席論教育要革命 浙江人民美術出版社 1968年3月
- 毛主席關於党的建設語録摘編 天津市革命委員会政治部編 天津人民出版社 1968年10月
- 毛主席批示(中共中央文書)(点字版) 盲文出版社 1968年12月、1969年2月
- 毛主席論对知識青年的再教育 四川人民出版社編輯, 出版 1969年2月
- 毛主席論对敵闘争 雲南人民出版社 1969年3月
- 毛主席論知識青年上山下鄉 雲南人民出版社 1969年3月
- 毛主席論世界革命 甘肅省革命委員会毛主席著作出版弁公室 1969年7月
- 毛主席論整党 上海支部生活編輯部編, 刊 1969年7月
- 毛主席論農業 甘肅省革委会政治部宣伝組編 甘肅人民出版社 1969年11月
- 毛主席論世界革命 甘肅省毛主席著作出版弁公室編, 刊 1969年
- 毛主席論工作方法 遼寧省革命委員会毛主席著作出版弁公室 1969年12月
- 毛主席關於国家学說的指示 浙江人民出版社 1970年7月 四川人民出版社 1970年8月 延辺人民出版社 1970年8月
- 毛主席論報刊宣伝 旅大日報社編印 1971年
- 毛沢東論統一戰線(意大利文版) 意大利米蘭 為人民服務出版社 1973年
- 毛主席關於教育工作的部分論述 山東人民出版社 1973年, 75年
- 毛主席關於發展農業的部分論述 寧夏日報 1973年12月13日

- 馬克思，恩格斯，列寧，斯大林和毛主席論教育革命 雲南省教育局師範教材編寫組編 雲南人民出版社 1974年4月
- 毛主席論中国近代史 華中師範學院歷史系編 1974年4月
- 毛主席關於意識形態鬭爭的部分論述 遼寧青年 1974年24期
- 毛主席關於培養和造就無產階級事業接班人的部分論述 遼寧青年 1974年24期
- 馬克思，恩格斯，列寧，斯大林，毛主席關於農業的部分論述 西北大學學報 1975年4期
- 毛主席關於鞏固和加強無產階級專政的部分論述 遼寧青年 1975年5期
- 馬克思恩格斯列寧斯大林毛主席論農業發展的弁証法 廣東師範學院學報 1976年1期
- 毛主席七屆二中全會以來關於階級鬭爭和無產階級文化大革命的重要指示 河南省圖書館 1976年5月
- 毛主席對陳獨秀右傾機會主義的批判 文社報 1976年10月7日
- 毛主席對李立三“左”傾機會主義路線的批判 文社報 1976年10月14日
- 毛澤東主席論婦女 中国全國婦女聯合會編 人民出版社 1978年8月，9月，12月
- 毛主席關於國內民族問題的論述選編 國家民族事務委員會編印 1978年10月
- 毛澤東論思想方法 北京大學哲學系，「紅旗」雜誌社編 紅旗出版社 1982年10月
- 毛澤東同志論黨的作風和黨的組織 中共中央整黨工作指導委員會編人民出版社 1983年12月
- 毛澤東論調查研究 中国統計學會馬克思主義統計理論研究組編 中国統計出版社 1986年8月
- 毛澤東論統一戰線 中共中央統一戰線工作部 中國文史出版社 1988年6月
- 毛澤東論林業 中国林業部 中央文獻出版社 1993年

